

## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 水は流れ、社会は

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 大村 樹花

太古より私たちは水と共に生きてきた。人間は海や雨などによる水からの様々な恵みによって生命をつなぎ、豊かさをもたらしてきた。きれいな水に恵まれている日本では、農業も漁業も私たちの食を支える大事な産業となっている。

最近私は、ALPS処理水の問題に関心をもっている。ALPS処理水とは、福島第一原子力発電所の放射性物質を安全基準を満たすまで浄化したものである。

このことは日本だけの話題ではない。世界各地で汚染水は処理されて海洋放出されてきたのは事実だ。つまり、ALPS処理水は安全だということだ。でも、それって本当なのかな。心の中に何とも言えない不安がつきまとうのはなぜだろう。

去年の春にテレビのニュースでALPS処理水の話

題が取り上げられていた。ALPS処理水についてよく知らなかった私は、処理水の放出のことを知って、それが何を意味しているのか、なぜ漁業者が反対するのか理解できなかった。

その日は、家族みんなで朝食を食べていたので、処理水について家族がどう感じているのか興味があったため聞いてみた。すると、母は、その海産物を買うことに抵抗がある様子だった。あまり買いたくはない。同じ東北人だし、本当は何も気にせずに応援したい。でも、どんなに安全だと言われても、その魚介類を将来のある我が子に食べさせたいとは思わないというのだ。正直なところ、私自身も全く気にならないとは、どうしても言い切れない。この番組では、専門家が食の安全について、分かりやすく説いていたにもかかわらず。

結局、私は処理水についての現状などを調べて理解をしても、安全に関する不安は消えることがなかった。また、海洋放出が最善の方法かどうか分からない。

しかし、ほかに良い方法も無い状態では、反対することもまた難しいのだ。風評被害。人ごとのように耳にしていたこの言葉が、実感を伴って理解できた瞬間だった。

漁業者が、処理水の海洋放出を反対する一番の理由は、この風評被害である。風評被害を減らす為の活動を、本当は私たちが一丸となって出来たのなら良いのにとと思う。だが、どんなに安全性を説明されたところで、信用しきれずに不安を抱いている人も大勢いる。調べても信用しきれない自分もそのうちの一人なのは確かだ。処理水について、一体どうすれば誰も不幸にならないのか、どうすることが正解であるのかなんて、私には何ひとつとして分からない。おそらく、ほとんどの人も私と同じように感じているにちがいない。たとえそうであっても、大勢の人がこの問題に目を向け、真剣に考えること。そして、言葉を交わし合うことが、私たちにできることではないだろうか。

私たちは、安全で安心なものを選んで食べたいし、

食べてもらいたい。それは、誰もが思っていることなのだ。だからこそ、福島の生産者も消費者である私たちも、苦しい思いをしているのだろう、いつか、処理水が安全だと皆が心から思えるようになり、何も気にせずに食卓を囲める日々が訪れる事を願うばかりだ。震災当時、私は二歳だった。あれから十二年経った今、震災の記憶はあまりない。それなのに、今でも福島原発の汚染水の風評が、色濃く影を落としている。とても残念だ。

水は流れ、社会はつながり続ける。水は東北だけのものではない。日本だけのものでもない。地球全体の宝物だ。世界をつなぐ大切な水について、互いに言葉を交わし合う世の中になってほしい。未永く、水と共に私たちの未来が輝くように。

優秀賞（岩手県知事賞）

水と共に生きる「盛岡」

盛岡中央高等学校附属中学校

二年 長内 沙羅

二〇二三年早々、驚きのニュースが舞い込んだ。アメリカで発行部数第三位を誇る日刊紙ニューヨーク・タイムズの「二〇二三年に行くべき五十二か所」において、ロンドンに次ぐ二番目に盛岡市が紹介されたのだ。

盛岡は私の通う中学校があり日常生活を過ごす場所である。昨年の夏、家族と鉾屋町周辺を散策する機会があり、盛岡の歴史や文化に触れるにつれて、自分自身も盛岡について知らない面がたくさんあることに気づいた。その一つが、盛岡の発展には水との関わりが大きな影響を与えているということだった。

盛岡は戦国時代に南部信直によって居城が移されたことにより誕生した。その理由の一つ目は北上川の水運を利用できる交通の要衝であったことである。後の

江戸時代になり、参勤交代を余儀なくされた諸大名は、江戸での日常生活をはじめ蔵米その他販売物資を国元から送らなければならなかった。盛岡藩は北上川舟運と東回り回路を利用することができた。水運は少ないエネルギーで大量の物資を運ぶのに適した輸送手段である。

二つ目は、北上川と中津川に囲まれた天然の要塞であったことである。北上、雫石、中津の三川合流点のあたりであった当時の築城地点は、花崗岩台地であり、建設は困難を極めたと考えられている。盛岡城築城後も、北上川は城の西南隅を激しく洗うように流れており、城壁や石垣が毎年のように崩壊していた。そこで南部藩は寛文十三年、北上川の河道を付替える新川開削工事に着手し、二年の歳月をかけて現在の流れのようになり改修した。このことにより、盛岡の治水技術は高められていったのではないだろうか。現在も、市の中心部を流れる中津川は、白鳥が飛来するなど、自然環境が市街化された周囲と融合して美しい景観を作り出

している。

市井の人々の生活においてはどうかであったか。鉦屋町の大慈清水を訪れた際、炎天下の中、湧き出している水の冷たさときらめきに感激し、周囲の歴史的町並みも相まって、とても風情があった。この大慈清水は近くにある青龍水とともに藩政時代から利用されていたそう。明治八年の寄進者名簿も残されており、昭和に入ってから利用者が組合を作り整備された。飲料水・生活用水として活用するために井戸周辺の住民で組織された用水組合が定期的に井戸の清掃・管理を行なっていることで、あれほどの美しい水が保たれていることが分かった。市水道が整備された現在でも、天然の地下水を求める多くの市民に利用されているようだ。この地域は盛岡町家などの歴史的街並みの保存活用と、水の恵みを受けて製造している造り酒屋や、豆腐屋、こんにやく屋、麴屋、蕎麦屋なども多く存在しており、これらの相乗効果で盛岡の魅力の一つとなっているのだと思う。ニューヨーク・タイムズで紹介さ

れていた喫茶店も、美味しい水があつてこそその美味しいコーヒーである。盛岡と水との関わりはとても深いものであるということに気づいた。

盛岡市では節水機器の普及・節水意識の高まり、大口使用者の井戸水への切り替えなどにより、人口増加に反し水道使用量は減少傾向にあるという。東京のある企業では二リットルの水で車の洗車が可能な洗浄液を開発したそう。それは節水のための素晴らしい技術であり、水資源を守る意識の高まりを感じる。しかし、水道料金から成り立つ水道事業は、料金収入の減少により水道施設の維持管理のための財源が不足してしまう恐れがある。上下水道は水の価値を高めるために人間が作り上げた衛生的にも非常に重要なインフラである。水と共に生きる盛岡において、このようなインフラに負担を掛けない使い方の意識と、自然と人間双方に有益な水の利用を考えていかなければならぬと思う。

優秀賞（岩手県知事賞）

見えない「誰か」のために

花巻市立矢沢中学校

三年 菊池 玄

僕の家は先祖代々、農家である。作物の中でも主に、米を作っている。僕の住む花巻市矢沢地区には八百年前に開発されたと言われる、「三郎堤」というため池がある。その三郎堤があるため、矢沢地区では、稲作が盛んである。さらに、僕の家には地下水を汲み上げて建てられた井戸があった。井戸を建てる時には、土地の神様水の神様を粗末にしないようにと「水龍明神」、「清水二大神」と石に彫り、今も正月やお盆には御神楽を舞って祭っている。

水についての作文を書くため、祖父に色々な水に関することを聞いたとき、祖父は農業をするに当たって一番大切なのは水と言い、さらにおいしい米を作れるのは水のおかげ、水の管理で米のおいしさが決まると

も言っていた。それほど、水は農業に関わりが深く、農家の人は水を大切に扱っている。

僕が小さい頃から食べ物を残したり、水を無駄に使ったりすると、僕の母は「世界には安全じゃないご飯と水で生活している人もいるんだ」とよく叱ってた。小さい頃は「別に僕には関係ない」と聞き流してきた。僕が、小学校高学年の頃、犬を飼い始めた。犬を散歩しているときと犬を飼っていないときとは違う景色が見えてきた。犬を見ながら散歩するため、視野は普段より下がる。だからこそ、普段気にならない用水路に落ちているたばこの吸い殻、田んぼの中に落ちているプラスチックが前よりも目に付いて、「世界のどこか、日本には関係ないこと」とは考えることができなくなった。

地球は、発見されている星のなかで、唯一水が存在している星だ。さらに地球の七割ほどが水で占められている。それらによって、地球は別名「水の惑星」と呼ばれる。だが、日本のように上下水道がしっかりと

整備され蛇口をひねったら、すぐに水が飲める国は、世界に十ヶ国ほどしかない。

皆さんの中で一日中水を使わずに生活する人はいないと思う。けれど、一日かけて水を確保しても安全な水に会えない人だって世界に、数え切れないほど多くいる。そんな中で世界的な人口爆発が急速に進んでいるため、水不足も急速に進んでいる。特に西南アジアやアフリカなどの乾燥地域では、川の水をめぐるって国同士の紛争も起きている。川の上流と下流での水の量の差が原因となり、民間人も巻きこまれる銃撃戦にまで発展する場合もある。民間人の中には僕たちと変わらない子供だってたくさん含まれている。

田植えの時期になると、田んぼに水が張っているのも、用水路に水が貯まっているのも、朝起きたら水が飲めるのも、僕たちの当たり前かもしれないけれど、「誰か」にとっては当たり前ではない。まだ、日本では川の水で争いが起きていないが、百年もたてばどう

だろうか。水に不自由を感じていない僕たちが不自由を平等に変えるべきなのではないだろうか。僕たちが百歳になったとき「年寄り」と呼ばれるのではなく、「水を大切にした先人」と呼ばれて胸をはれるように変えればよいのではないだろうか。今、見て見ぬふりをしてこのまま過ごしてよいのだろうか。こんなにきれいな水を使って過ごせることにもっと感謝したほうがよいのではないだろうか。

透明な液体に「水」と名付け、その「水」共に人類は生活してきた。皮肉なことに、「水であふれる水の惑星」は、「水不足」という最大の危機に直面している。僕たちにできることは、安全な水を使用することに感謝すること、水の大切さを広めること、水を大切にすること。未来の自分のために、水を無駄にせず、大切に大切に扱えば、結果自分だけでなく、「誰か」のためになる。今日したことがいつか「誰か」の明日になるように。

優秀賞（岩手県知事賞）

流れてつきぬ豊かな北上川を未来へ

奥州市立水沢中学校

三年 竹花 紀慧

「ふりそそぐ日の光 月影のせて 川は北上ゆたかに  
流れ」 「流れてつきぬ 北上川 胆沢川」。これは、そ  
れぞれ僕たちの母校の中学校、小学校の校歌の始めの  
部分だ。北上川は僕たちにとって母なる川だ。その全  
貌を知りたいと思い、僕は源流と河口へ向かった。

その北上川は、二百四十九キロメートルあり、十四  
市町を経て、太平洋へと注ぐ。その源流は、岩手町に  
ある「弓弭の泉」。僕にとっての北上川は、たくさんの  
川が合流し、長い橋がいくつも架かる大きな川であり、  
米どころを支える恵みの川であるが、その始めは、静  
かな境内にある大木の根本から流れ出る小さな流れだ  
った。夏でも冷たく、口にするとやわらかさを感じた。  
実際に出発点を訪れたことで流れがどうなるか知りた  
いと思った。

宮城県の追波湾に注ぐ河口へ向かった。ずっと続く  
穀倉地帯を悠然と流れる北上川。対岸の車が小さく見  
えるほど川幅は広い。長い旅の途中でたくさんの田畑  
を潤したその流れは、河口で太陽を受けて輝き、おだ  
やかだった。そして姿を変え、新たな旅を始めた。

とても身近な北上川。東北一の川で、江戸時代には、  
荷物を運ぶ交通としても利用され、この地方の発展を  
支えてきた。さらに、それよりはるか昔、平安時代、  
この辺りは平泉を中心とする文化が栄えていたが、そ  
れを支えていたのも北上川だと言われている。この時  
代に、遙か遠くの夜光貝や焼き物が太平洋や北上川を  
通って伝わり、黄金文化が花開いた。

今でもその豊かな水は、米作りなどの農業を支え、  
工業を發展させ、文化を生み、僕たちの生活を支えて  
くれている。その水質は、毎年、北上川合流地点の川  
の水生物調査を行っているが、きれいな川と分類さ  
れている。

しかし、「水質階級」に分類される北上川だが、強酸

性抗廃水による水質汚濁で赤く染まり、魚類も生息できない「死んだ川」と呼ばれた時があった。四十年ほど前のことだ。そして、抗廃水は今も流れ続けるので、二十四時間機械で濾過されて川に流されている。

また、時に流れは牙をむく。台風で川が溢れ、津波が川を遡り、そして、町を飲み込み、多くの命を奪ったことを忘れてはならない。

北上川をはじめ、身近なところに水がある生活で、さらに、地球は水の惑星をよばれ、水が豊富にあることを疑わない僕の毎日。それを、直径一メートルの地球に例えたらどうなるか、水生生物調査の際、講師の先生に教えていただいた。調べてみると、全ての水を集めても、六百七十七ミリリットルで、ペットボトル一本分ほどにしかならないのだそう。そのうちの九十七・五パーセントは海水。生物がそのまま利用しやすい状態の水は小さなスプーンたった一杯でしかないと言う。

また、地球上の水の総量は、四十億年前から変わら

ないという。そして、新たに作り出すことはできない。姿を変え、形を変え、循環し続けている。水は、僕たちの生活はもちろん、命そのものを支えてくれている。身近なものであるが、作り出すことができない限りある資源でもあるのだ。

身近過ぎて意識することも少ないが、水がきれいであることは当たり前ではないこと、利用しやすい水が本当に貴重なものであること、水は新たに作り出すことができないこと、そして、人間の力ではどうすることもできない大きな力を持っていることなど、もっと水について知りたいと思う。そして、いつまでも共存していきたいと思う。

北上川の源流、弓弭の泉。静かで厳かな佇まいから、四十億年も巡り続ける水が、また新たな姿となり生まれる。その水が流れ始め、僕たちの生活の一部になっていく。長い長い巡りの中、今、僕たちと時を共にするこの水を、「豊かに流れ」「流れてつきぬ」この川を未来へ届けたいと思いませんか。



## 優秀賞（岩手県知事賞）

### 水を守り、命を守る

奥州市立水沢中学校

二年 田高良 咲希

小学六年時の修学旅行で、私は沿岸地域を訪れた。岩手県の沿岸地域と聞くと、やはり三陸リアス海岸が思い浮かぶ。親潮と黒潮がぶつかり、豊富な種類の魚介類が水揚げされることから好漁業として有名だ。私は、母の地元が沿岸地域だということもあり、魚介類が好きだった。そのため、食事で美味しい海鮮料理が振舞われたことが何よりも嬉しかった。修学旅行中に何度か目に映った海は、澄んでいて水平線が見えるほど綺麗だった。

当時は、気にならなかつたが、今は「水」について考える機会だ。新鮮な魚たちと、綺麗な海の二つには、何かしらの関係があるのだろうか。「大切な水」「命を支える水」というような俗に言われる言葉には、どんな意味が込められているのか、私は知りたくなった。

海が私たちにもたらすメリットは、かなり大きい。食料が得られることはもちろん、海洋生物からバイオ燃料や医薬品がつくられるなど、重要な天然資源が手に入る。私が普段使っているハンドクリームの成分表記を見てみると、ヒトデから採取される成分が含まれていた。身近にある物にも関わりがあることを発見でき、驚いた。また、海は私たちが見えないところでも、気候変動の緩和や廃棄物、汚染物質の分解と排除などにも役立つている。このように、メリットが多い海だが、環境問題の進行は止まらない。近年、よく話題に取り上げられている海洋ゴミの量の増加。ゴミの量が増加するということは、当然、水もどんどん汚くなっていくということ。水が汚れるとプランクトンが増えて海が赤く染まったり、酸素不足で海中に魚が生存できなくなったりしてしまう。以前、話を聞いたことがあるが、これは海洋生物に限ったことだけではない。人間にも悪影響を及ぼすことがあるのだ。有害物質を取りこんでしまった海洋生物を人間が食べることによ

り健康被害を受けることも起こりうるという。

水、魚、そして人間までも互いに関わり合っている。水を綺麗に保つと、魚も人間も健康に生きることができる。水を汚すと、魚も人間も傷つくことになる。海洋ゴミは毎分トラック一台分が海に流れ込んでいる。しかも、そのゴミの七、八割は私たちが陸で出しているゴミ、いわばポイ捨てが大きな原因となっているのだ。私はこの事実を知って思いあたる節があった。私の友人はときどき、プラスチックゴミなどをポイ捨てしている。軽く注意はするが、「これくらい大丈夫でしょ」と言って笑って、はぐらかされるだけでなかなか改善してくれない。しかし、「これくらい」の気持ちがある世界中で積み重なり、集結することで環境問題はいつまでも進行していくのだと私は感じた。軽い気持ちで捨てられたペットボトル、プラスチック、ビニール袋などが川や水路を通り海に流れ着く。海はつながっているから世界中に広がっていく。そうやって水は汚れていく。

「大切な水」「命を支える水」この言葉にどんな意味が込められているのだろうか。私の最初の疑問。「大切な水」に隠れていたのは、魚や人間。「大切な生命」だったのだと気づいた。水を大切にすることこそ、命も大切にできる。守ることができる。それが「命を支える水」という意味なのだと思う。

みんなにも気づいてほしい。水が大切なことに。環境問題は世界全体の問題。今の私にできることを考えてみたけれど。ゴミ拾いや周囲の人たちにポイ捨てをやめるよう声をかけることくらいしか頭に浮かばない。でも、実際それは、世界に大きな影響を与えるかという、残念ながら、そうでもない。だから、一人一人に考えてほしい。環境問題が進行している今こそ水の恵み、水の危機、自分にできること、考えてほしい。一人一人に。

佳作  
(岩手県知事賞)

「命の水」を守りたい

奥州市立水沢南中学校

三年 遠藤 佳花

山々をさらさらと流れゆく川、私たちの住む国日本を囲む雄大な海、雲となつて空を流れて、また、地に降り注ぐ雨や雪……。私たちの周りには、いろいろな形となった「水」が多く存在している。

私の住んでいる奥州市は、水と深いかかわりがあり、人々は水と共に生活をしている。私の通学路は水田に囲まれているので、春は、青い空と白い雲が水を張つた田んぼに写ってきらめいて、とても綺麗だ。地区は少し離れるが、胆沢ダムや円筒分水工なども地域の人々の思いのこもった、「水」を守る建造物である。特に、私は、円筒分水工の歴史を学んだときに、とても感動したことを覚えている。

円筒分水工は、胆沢平野の農業用水を公平に配分するための分水施設である。これは昔、「寿安堰」と「茂

井羅堰」が胆沢川から直接取水していた時代に起きてしまった、血を流すほど激しい水争いの解消を目的に作られたものなのだ。

昔、この地域で水に困っていた人々の作り上げた、争いをなくし「平和」を作り出す施設。それが今でも、私たちの暮らしを支え、そばにある。そのことに私は深い感動と強い衝撃を受けた。同時に、円筒分水工とそれを作った人々、守っている人々、つないでいこうとしている人々を尊敬したのである。

さて、私はここまで水について、「私たちの周り」や「水と共に生活している」など、とても身近なものあるとして話をしてきた。しかし、今現在、私の思う水の存在が、「身近でない」世界があることは、目を背けることができない事実である。

水不足に直面している世界。水が決して安全ではない世界。それによって、命を落とすことも少なくない世界……。悲しいけれど、辛いけれど、こんな世界があるのが、現在で事実だ。

なんと、驚くことに、国土交通省の資料によると、世界の国のうち、「水道水をそのまま飲める国」は、日本を含め、たった十二カ国しかない。「そのまま飲めるが、注意が必要な国」は三十二カ国だそう。これらは、逆にとらえると、安全な水道水を飲むことができない国は、数多く存在するということになる。

「水」は、私たちの命を守る大切なものだ。同時に、一つの間違いで命を奪う悲しいものにもなる。違法投棄の危険な盛り土による土石流が、二十八人の命を奪った熱海の災害は、記憶に新しい。一つ一つの尊い命。短くしてその命が断たれることは最も悲しい。

世界をすぐに変えることはできない。でも、一人一人が少しずつ変えていけば、きっと世界も変わっていく。私たちにできる事とは、何だろう。

今、世界中で推奨されている「SDGs」の中に「六、安全な水とトイレを世界中に」、「十三、気候変動に具体的な対策を」がある。一見難しそうに見えるが、細かい方法を考えてゆくと分かりやすい。

例えば、「環境に優しい洗剤を使うこと」や「水道の水を出しっぱなしにしないこと」などである。また、川や海をきれいに保つこと、保水してくれる山を大切にすることも、私たちができる取り組みだ。

私たちの星「地球」。その地球では今も温暖化が進んでいる。私たちの命を守ってくれる「水」を、私たちは守らなければならない。「水」と生きることは「地球」と生きることである。日々の暮らしとかけがえのない命を守るために、身近な水について考えることが、今、私たちにできる、地球への優しさなのではないだろうか。

## 佳作（岩手県知事賞）

### 命の「水」

花巻市立矢沢中学校

三年 押切 優奈

あなたにとって「水」とはどんな存在ですか。今、私にとって「水」は生きるためになくてはならない大切な資源だと感じています。

私はこれまで、水についてあまり考えたことがなく、当たり前のように使ってきました。しかし、この作文を通じて、水に関する問題を調べていくうちに、世界中でさまざまな問題を抱えていることが分かりました。

調べたところ、一人あたり一日に使用する水の量は、およそ三百リットルでした。日本においては水が不足して困るということは、あまり考えられません。しかし、世界では水不足が深刻化しており、当たり前前に清潔な水を確保できない地域が多くあることが分かりました。

その一つがアフリカ諸国です。アフリカ諸国では、

安全な飲み水を得られないことが原因で、年間、約三十万人もの子供が感染症によって命を落としています。この国の人々は「どんなに汚くても、生きるためにはこの水を飲むしかない」という状況で生活しています。また、その水を得るのに、子供たちは毎日遠くの水源まで水をくみに行っています。しかし、水源にたどり着いても、その水の多くは、泥や細菌、動物のふん尿などが混じった汚く危険な水です。私はこのような現状がアフリカ諸国で起きていると知ったとき、私たちが住んでいる日本はとても恵まれていると思いました。

そのようななかで、私たちが住んでいる日本においても、水の重要性や大切さが感じられる出来事がありました。それは、今から十二年前に起きた、あの「東日本大震災」です。当時、私は二歳だったのであまり覚えていませんが、両親から聞いた話によると、「電気・水道・ガスなどの全てのライフラインが止まってしまい、とても困った」と言っていました。特に水に

関しては、飲み水や食事、トイレやお風呂など生活にとても関係しているので困ったそうです。

また、「水が止まったときは、どのようにして生活していたの？」と聞いたら、「小学校に給水車が来てくれて、ペットボトルやポリタンクを持って水をくみに行ったんだ。この限られた水を大切にしながら生活したんだよ。」と話してくれました。私はこの話を聞いて、災害時に水が無ければ生活するのにとても不便で大変だと思いました。

私たちが住んでいる日本では、蛇口をひねると水が出るということが当たり前になっています。しかし、東日本大震災では当たり前のことが当たり前ではなくなりました。蛇口をひねっても水が出ず、給水車に頼らなければ飲み水や生活に必要な水を確保できない。私は「水」がどれほど私たちの生活に結び付いて、どれだけ身近で大切な存在だったのかこの出来事を通じて強く実感しました。

東日本大震災以降、私の家では節水を心掛けるよう

にしています。

例えば、シャワーや手を洗うときは、水を出しっぱなしにせず、こまめに止めるように心掛けています。また、お風呂の残り湯は洗濯に再利用しています。他にも私たちが取り組める節水方法はあると思いますが、一人一人が節水を心掛けて生活していくことが、とても大切なことだと思います。

今でも、世界中の水不足や水問題は全て解決されず、苦しんでいる人々もたくさんいます。この苦しむ人々を一人でも多く救うため、私たち一人一人ができることを考え、何か一つでも行動に移すことで、助かる命もあると思います。私はこの先も、すべての人々が自由に生活できる環境がいち早く来ることを願い、行動していきたいです。

## 佳作（岩手県知事賞）

### 水と普通と輝きと

花巻市立矢沢中学校

三年 菊池 凜

水。それは私達の生活の中にあたりまえのように存在しているものです。水は人間が生きていく上でかかせない、非常に重要なものです。しかし私は、それと同時にありがたさを感じるのがとても難しいものだと思います。

私は水が好きです。水はあらゆるものに変化する、全ての源のようだと思います。私が小学四年生の頃、浄水場を見学し、汚れた水が綺麗になっていく工程を学びました。当時はただ綺麗になっている、としか思っていないでしたが、今考えてみると水を綺麗にするということは、新たに命を吹き込むことであるというように感じます。一度は使用されて失った輝きを取り戻している、そう考えると水とは私達が思っているほど単純なものではないように思えてきます。

水について調べていた時、私はとあるインターネット記事を見つけました。なんと世界中で汚染水が販売されたというのです。私は目を疑いました。なぜそのようなことをしたのでしようか。詳しく調べてみると、販売された汚染水はアフリカのサハラ以南地域で実際に使用されているもので、水の汚染問題の深刻さを広めることを目的に販売されたらしいです。すぐに話題になってメディアなどに取り上げられ、多くの人々が汚染水を購入しました。ニュースで知るだけではなく、「問題を自分の目で見る」ということが重要なのだと教えてくれました。

私達があたりまえに飲んでいる水は透明で綺麗な水です。少し離れた土地では飲めば多くの病気を引き起こす汚染水で生活することを強いられています。私達にとっての普通と、離れた土地の人々にとっての普通は違うのです。私達が綺麗な水で生活できることはあたりまえではないのです。私達が今でも生きていられるのは誰かの助けがあるからなのです。顔も名前も知

らない誰かに感謝することを、忘れてはいけなと思います。

綺麗な水は飲むなどの生活に使用するだけでなく、ただ見ているだけでも利益を与えてくれるものだと私は思っています。透き通って光り輝く水。それを見ていると、穏やかな気持ちになれるのです。学校で嫌なことがあった時、ふと飲むうとしてコップに入れた水が目に入ると不思議な気持ちになります。言葉では言い表しがたい、落ち着いた気持ちになってストレスがすっと消えるような気がしてくるのです。水紋が広がった水面を見るとその効果が増しているように感じます。水とはもしかしたら、とても万能なものなのではないと思います。心を穏やかにしてくれて、私達の生活を支えてくれて、とてもおいしい。水は本当にすばらしいと思います。その水が世界で汚染されて苦しんでいる、ということは頭の中ではわかっています。それでも、自分の住んでいるこの日本であたりまえのように水を手に入れることができるのが、とても嬉しくてし

かたがないのです。

アフリカなど、今現在も苦しんでいる人達のために、何かできることがないかというのによく考えますが、結局は行動に移すことができません。学校の授業でそれらことについて触れても、かわいそうだと思うだけで何もしない、できない私が本当に情けないです。前述した汚染水の販売も、問題から目を逸らさずに向き合うためにはとても有効だと思います。しかし、一個人にできることには限りがあります。一人一人の小さな力でできることは何か、それを考えるのは今を生きる私達の課題だと思います。

日本という国では綺麗な水を飲むことができる、それだけで私達は恵まれているのだと思います。ならば、恵まれた私達の行動は非常に重要なのではないのでしょうか。私達のすべきこと、できることを、自分の目で見て判断することが大事なのです。



佳作（岩手県知事賞）

私達日本人が忘れた水の役割

花巻市立矢沢中学校

三年 佐藤 本基

地球は何と呼ばれているか知っていますか？地球は、「水の惑星」と呼ばれています。それは宇宙の中で「水」が存在するのは地球だけだからです。水のおかげで真っ青でとてもキレイな惑星に私たちは生きています。

私たちの生活で水の役割はとても重要です。まずは飲み水や食事、お風呂、洗濯など私たちの生活の中で無くてはならないものとなっています。そして農業や工業用水などでも、水は必要不可欠です。社会の授業で習ったように、世界中の都市は、水を活用して街が栄えたという歴史があります。私が住む花巻市にも日本で四番目に大きな北上川が流れています。

私が生活する日本は、豊かな水に囲まれてとても恵まれています。飲みたい時にすぐ美味しい水が出てきます。シャワーもお風呂もいつでも水が使えて便利で

す。

しかし世界中にはその水を飲むことすらできない国があります。

地球の人口は、約八十億人と言われ、そのうち四分の一が貧しい生活をしていると言われています。テレビでよく目にする発展途上国では、すぐに飲める水がなく、浄土処理が行われていない汚い水で料理や洗濯をしています。その不衛生な水が原因で命を落としてしまう人もいるそうです。生活するための水を得るために、私たちより小さな子供たちが、重い水を持って長い道のりを歩き運んでいる姿を、テレビで見たことがあります。そのため、一日のほとんどが水汲みに費やさなければならぬので、子供たちは学校へ通えないそうです。

道徳の授業でも習った、中村哲さんという医者がいいます。中村さんが医者として訪れたアフガニスタンは、飲む水も十分になく農作物を育てることができない状況でした。それを見た中村さんは、病気を治す前にま

ず水が必要だと考え、最初は井戸づくりから始めたのですが、井戸を掘ってみると地下水が枯れ始めていることに気づき、大きな川から水を引くことが必要と考え、用水路を造ることを決意しました。

中村さんは建設工事の知識はなかったようですが、娘さんの数学の教科書を借りて、一生懸命苦手の数学を勉強し直し、独学で土木技術を習得して、井戸掘りから十年後の二〇一〇年に二十五キロ続くマルワリード用水路という用水路を完成させました。それからは一六〇〇本の井戸を掘り枯れた土地に水を引き農業を再開させ村人たちの生活を支えるまでになりました。

残念ながら二〇一九年に銃で打たれ、倒れてしまいました。私には中村さんの話を聞いて医者としてだけではなく、農地を復活させて村人たちの生活も助けたという、その行動力は素晴らしいと思いました。

私は、中村さんや世界中の水に困っている子供たちの話を聞いて、いま自分の生活がとても恵まれていることに気づかされました。ただただ気にせず水を使っ

て生活をしていましたが、自然水を生活用水に変えるための利水技術、水処理プラントを使って汚水や排水を処理し水質を改善するための技術、川の水が溢れないようにする治水技術など、日本の技術に驚きを感じました。

中村さんの好きな言葉に「一隅を照らす」という言葉があるそうです。意味は、自分がいる場所で一人一人がいかに自分の力を尽くすか。その積み重ねが世の中のためになる、という意味の言葉です。偶然、私の通う中学校の体育館にもこの言葉が飾られています。「水」というテーマでいろんなことを調べ、改めて多くのことを学びました。自分の恵まれた環境に感動しながら、中村さんのような人のために行動できる大人になりたいと思いました。

## 佳作（岩手県知事賞）

### 湯水のように

奥州市立水沢中学校

三年 鈴木 佳乃

私は週に一回、江刺に住んでいる祖父母の家に泊まりに行っている。二人ともとても優しく、たくさんのものを食べさせてくれるし、好きなこともさせてくれる。つまり、私は長らく「甘やかされて」育ってきたのだ。しかし、中学三年になりにか申し訳なきを感じるようになった。考えた結果、次の日の朝にみんなで食べるお米をとぐことに決めた。することは単純だ。まず、炊飯器を洗い、米をとぐ。といたら炊飯器の釜に米を入れ、水をはって予約をする。はじめ、私はこれだけの作業にずいぶん手間取り、とても時間がかかった。だんだん慣れてきて、余裕が生まれたらあることに気づいた。水の使用量だ。時間がかかっていた頃、私は何をしていても水道の水をだしばなしだった。これに気づいた時、私の脳裏に「全世界の人がこんな

に水を使いつづけたら、いずれ廃水だらけで飲める水がなくなってしまうのではないか」ととてつもない心配が浮かんだ。気になったので、日本や世界が抱えている水の問題について調べることにした。

学校の図書室から借りた本を読んでもみると、地球の水資源には限りがあることがわかった。とくに私たちが住んでいる日本は人間が利用することのできる水量「水資源賦存量」が世界平均の半分以下と水資源に恵まれているとは思えない結果だった。そんな日本の中でも地域により格差があるらしい。これにはとてもショックを受けた。日本の降水量は他国と比べても明らかに多いはずなのに、なぜこのようなことになってしまうのか。考えられることは二つだろう。一つは地球温暖化により、降ってくる雨が酸性雨へと変化してしまったことだ。酸性雨は私たち人間が飲むには有毒だ。飲めない水が増えても水資源賦存量が増えるわけではないだろう。もう一つは、私がお米をといでいるときのように、人々が過剰に水を使っていることだ。

どんなに飲める水があっても、無駄遣いをしていたら現状を変えることは不可能だ。地球温暖化を止めることが難しくても、節水は、小さなことから始められるのではないか。小さなことといっても、今までしてきた日常の一部を節水のために変えるということでもある。急に変わるといえるのは簡単ではないだろうし、続けることは大変だ。しかし、水資源を守るためには必要なことだろう。

昔、「湯水のようにお金を使うな」と大人から言われたことがある。この言葉は惜しげもなくお金を使っただけではないという意味らしいが、今になって考えてみるとなぜこの言葉のたとえに「湯水」が使われているのだろう。これでは、水はいくらでも使っているように聞こえてしまう。だが、実際は違う。水だって限りある大切な資源だ。「湯水のように」というたとえがなくなるよう日々の節水を心がけなければならぬ。

まだ中学生である私にとってできることは限られて

いる。魔法使いではないから水を念力で増やすことはできないし、泥水といった飲めない水を浄化することも難しい。ただ、お米をとぐ時に水の量に気をつけて作業をすることはできる。まずはそれから始めてみようと思う。